

月田秀子の昨日、今日、明日・・・

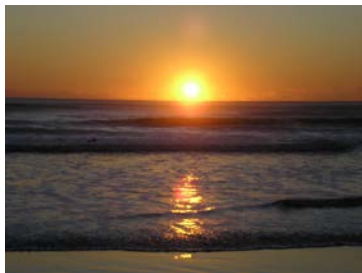
新年、房総・九十九里浜にて

昨秋、湘南の藤沢から房総の東金に引っ越した。二年足らずの藤沢での生活が、さらなる田舎暮らしへと私を駆り立てたのだ。

元旦は九十九里浜へ繰り出してみた。1988年の新年、ポルトガル、アルガルヴェのモンテゴルドの浜での朝を思い出した。朝になるのを待ちきれず、日の出前に私は宿を抜け出し、浜辺へ向かった。砂浜に残された千鳥の足跡、濡れた砂に細長い影を落とす浜ぼうふう、打ち上げられた貝殻、それらを波がやさしく洗ってゆく。何事もなかったかのように広がる砂浜。言葉の通じない異国での生活の中で、カメラがただ一つ私の心のよりどころだった。

それらを私はひとつひとつ写真に収めた。

九十九里浜の朝焼けに私はその時の感動を思い出した。



歌うほどに

悲しみは大きくなり

波のように砕け散り

歌うほどに悲しみは

砂浜をやさしく愛撫する波の泡になる

そうして私はまた海へ帰ってゆく

勲章受章—喜びは私だけのものにあらず

2010年秋、ポルトガル大統領より功労勲章「メリト勲章」を受章した。授賞式は在日ポルトガル大使公邸で行われた。受賞者は私を含めて9名。その中には、私がポルトガルに滞在していた時からの知己市之瀬敦氏(上智大学教授)をはじめ、日埜博氏(流通経済大学教授)、林田雅至氏(大阪大学教授)、Jose Julio Rodrigues氏(京都外国語大学教授)らの懐かしい顔ぶれがあった。それぞれの髪に白いものを見た時、重ね



てきた年月の重さを思った。加えて、「他の受賞者の皆様のように、大したことをしてきたわけではないのですが・・・」とあいさつされた一番大きい勲章を受章した自

民党総裁谷垣貞一氏の顔もあった。祝賀会に出席したマリオネットの湯浅隆氏の、「まず月田さんに受賞していただかないと、我々は後に続くことができないんですよ」の一言は、ずしりと心に応えた。私は孤高であることを自負し、後進のことなど考えたことがなかったからだ。

推薦者から叙勲の打診のようなものがあつた時、できることならばしてほしいと心では願っていたのだが、いざ、その勲章なるものをいただいてみると、その効力は絶大なるものがあることをその日から徐々に知ることになった。お祝儀、お酒、お花、お祝いの手紙、ファックス、メール、電話、ノーベル賞にはもちろん及びもつかないが、予想外の沢山の方々からお祝いを頂いた。皆、自分のことのように、長年の努力が認められたことを喜んでくれた。私は、それが何よりも嬉しかった。そのような声を聞くたびに私の喜びは増していった。

みなさん、本当にありがとう！

線維筋痛症と私

線維筋痛症と診断されて2年が過ぎようとする秋の初め、私は千葉の東金に引っ越した。杉木立の細い道を通り、こんなところに？という突き当たりにあるこぢんまりした木造の日本家屋だ。母屋の東側はガーデニング用の芝生の庭、西側は菜園スペースがある。

ここならもう少しゆっくり生きられそうな気がした。この病気にはそれが必要なのだと思う。

行政の取り組みと並行して必要なのが周囲の理解と援助だ。『助けてもらうことが申し訳ない』などと思わずに、「ありがとう」と一言いって負い目なく援助が

< 其の参 >

ナザレの風景

Y. H (堺市)

そのとき、わたしは「サウダーデ」ということばを、耳にしたことすらなかった。

今から 35 年も前のこと。英会話教室のクラスメイトに誘われて、ヨーロッパ旅行へと旅立った。ある女子大の卒業旅行で、そのツアーの員数不足の穴埋めに、お鉢が回ってきたらしい。行く先々で美術や音楽の鑑賞が待ち構えている。「芸術の旅」というキャッチフレーズにも、食指がはたらいた。オランダ、スイス、イタリア、フランス、それにスペイン、ポルトガル、バチカン市国をふくめれば 7 カ国をめぐる三週間の長旅だ。今にして思えば、初めての海外にこんな時間も費用も体力も必要な旅に心配はなかったのかとあきれるが、30 代最後の記念に、などと勝手な理屈をつけて決心できたのは、一人身の気楽さも手伝っていたのだろう。

地続きのヨーロッパとはいえ、それぞれの国にはそれぞれの色合いがあった。わたしには、予備知識がないかわりになんの偏見もなく、だから、まっさらな紙に思いのたけを描くように、心のキャンバスに、訪れた国々、地方々々で感じた風景を刻んでいった。

まだ旅の 2 日目のパリで、なげなしの小遣いの大半を失っていて（ガイドさんは、バッグの持ち方にまで十分気をつけるように注意してくれていた）、この先の難儀を考えれば、浮かれた気持でいられるはずもなかったが、見るもの聴くもののインパクトのほうがあるかに大きかったのは、何よりの幸이었다。

旅の後半、スペインをめぐるのち、ポルトガルへ。どちらも、かつての海洋国として世界に覇を唱えた国だというぐらひは知っていた。しかし、かつての輝きはもう、どちらにもないように見えた。

イベリア半島にどっかり陣取るスペイン。それに比べてちんまりと控えるポルトガル。アルハンブラに闘牛、フラメンコと、見所たっぷりのスペインで堪能したあとでは、ポルトガルはどうしても地味だ。しかし華やかさは身にそぐわないわたしは、むしろ、ポルトガルのほうがこころになじんだ。日本とは、古くから

受けられるようになるべきだと思う。そういうストレスがこの病気には一番の敵なのだから。痛みは共有できないにしても、痛みをわかってくれる人がいるだけでどれだけ痛みが軽減されることだろう。

五木寛之氏が「人間の運命」という本の中で、諦めるという言葉は「明らかに極める」ということだと書かれている。自分が背負っている運命、線維筋痛症という難病を認識して「知る」、「明らかに極める」ことで、背負っている「荷」が軽く思えるような気がする。ましてや、苦しんでいるのは自分だけではないということに気がついた時、荷の重さに耐えている自分がなんともいとおしく、涙が熱くホホをぬらす時、痛みはその時だけ消えている。それは生きていることの素晴らしさだと、私は思う。

人間は誰しも何らかの苦しみ、悲しみを抱え生きている。苦しみ、悲しみを共有することで人はその苦しみを越えることができるのじゃないかと、だからこそ、生きている素晴らしさを実感する瞬間があるのだと私は思うようになった。

たわごと

メール

亡くなった人にメールを送ってみた

ひょっとして天国まで届くかもしれないと思って

宛先不明で戻ってきたのもあるけど gmail のアドレス宛での

故人へのメールは戻ってこない

ひょっとして・・・？

名刺

フアド倶楽部の会員のみみんなに会報と一緒に送ろうと思い

立ち、勲章をつけた記念写真入りの名刺を作った。

A4 の光沢紙に 10 枚ずつ印刷して、それをカッターナイフで一枚一枚切って、はんこを押してみた。

肩書きは「フアド歌手」

乾かすために並べたその名刺をながめていてふと思った。いつの間には私はフアド歌手とやらになったのかしらん？

そうあれはポルトガルから帰ってからのことだった。

初めて作った名刺に、名乗ったもの勝ちだとばかり

思い切って「フアド歌手」と入れてみた。

その時は確かに本物からは遠かった。なら 今は？

こんなこと言ったらポルトガル本国から勲章返せと言われるかな？

ファンのみみんなからはひんしゆく買うだろな？

の往来があった、ということも親しみを感じた原因だったかもしれない。

ナザレは、当時も観光地だったのだろう。それにしても、このとき初めて聞いたこの漁村の名前がはっきりと記憶にとどめられ、折に触れ、ふと、その風景が蘇ってくるのはなぜだったろう。

粒の粗い白砂の浜が、どこまでも続く港町。初秋という季節のせいもあったのか、海の色もいくらか沈んでいた。

海岸に面して建つ貧しい家の入り口のコンクリートの階段に、一様に黒づくめの服をまとった幾人かの女がうずくまっていた。日がな一日、海を見ているらしい。通りすがりの私たちにも、さしたる関心を示さない。

「どうして、みんな黒い服を？」ガイドさんに訊いてみた。「彼女たちは、漁に出て帰らない夫を待っているのです。7枚もの黒いスカートを重ねてはいているのです。死ぬまで、あの服装で」ああ、喪服を着て、悲しみに耐えているのか、重ねてはいたスカートは、貞操の印か。浮かれた旅人の気持ちをかすめたのは、たったそれだけのことだった。

ファドを聴いたのは、その前だったか後だったか定かではない。いずれにせよ、ナザレの女たちとファドが私の中で結びつくはずもなかった。

それから10数年も、ファドのことは忘れていた。友達に強く誘われて行ったAという小さなライブハウス。そこが、月田さんとの出会いの場となった。マイクを持ちながら、それは申し訳で、決して口元には持っていこうとしない。生の声に自信があり、聴き手もそれを望んでいるからだったろう。手を伸ばせば届く距離から発せられる力に満ちた声。すべての音域にむらのない、突き抜けるような声だった。耳から聴くというよりは、体全体に響いてくる。空間全体が月田さんの声で濃密に満たされる。ポルトガル語もわからず、生まれて初めて聴く歌の数々。確か、生活に根ざした愛の歌。リスボンの酒場で初めてファドを聴いたとき、そんなことを聴いたのを思い出した。

物憂い感じのものが多いが、決してじめついではない。悲しみを訴えるというよりは、歌に託した秘めたおもしろいものが滲み出すようだ。豊かな暮らしとは無縁の人々の歌であるにちがいないのに、どの曲もおおらかで、卑しきなどみじんも感じられない。そのときすでに月田さんの歌の虜になっていた。以来、私のファド遍歴はつづいている。これほどくり返して同じ人の歌

を聴きに行くということも、ほかにはなかった、と今にして気づいた。

なにごともない幸せの歳月は、ファドには似合わない。そんな私の勝手な思い込みに沿うように、というわけもないのに、大事な伴奏者を失われたり、なにより大事な財産であり、ファドを歌いづづける源泉でもある健康を損なわれたりと、月田さんの日常にもたびたびの困難があったことを知っている。しかし、それらのことが月田さんにとって、あながち無駄なことだったとは、どうしても思えないのだ。

歳を重ねて、ますますほんとうのサウダーデが月田さんのファドから滲み出す。そこに共感して、また次も聴きに行きたいと、心がときめくのだ。

ナザレの海辺の風景とサウダーデと、そして月田さんのファドとが、今は分かちがたくわたしの心を満たしている。

Obrigado

鳴海通温（青森）

今でもそうですが、アルゼンチンのタンゴとフォルクローレに嵌っていました。若い頃見たフランス映画、「過去をもつ愛情」の中で、アマリア・ロドリゲスが、酒場で「暗いはしけ」を歌うシーンがありました。それまであまり知られていなかったファドが、世界中に広まり私も虜になったのです。

日本でファドを歌う人がいないかと探しました。月田さんにめぐりあいました。20年近いお付き合いの中で、一番の印象は私の第二の職場退任記念コンサートでした。勝手な企画に快く応諾いただきました。98年4月21日、「ワインバル・クランベリー」、90人近いお客様でした。青森市に月田さんの歌が流れたのです。青森市に初めてファドが流れたのです。今でも語り草になっています。

翌日、弘前公園を散策したことも、私にとっては今も大切な思い出です。弘前公園の桜祭りは、毎年23日オープンです。ところが、この年は桜の開花が早く、すでに殆ど散ってしまっていました。散った花びらがお堀をピンク色に染めて、...

母（95歳）の介護であまり出れなかったのですが、昨年11月に老健施設へ入所し母も私も私も安らかな日々を送っています。

昨年の函館でのコンサートには、津軽海峡を越えて行けませんでした。必ずお目にかかりに上がります。てづくりの野菜でお元気に！！！！！！

ファドを想う

森本治臣(大阪)

この10月宝塚歌劇「コインブラ物語」を観た。タイトルからポルトガルの話であることはすぐわかった。何はともあれ見逃さない。ポルトガルの古い都コインブラで起こったペドロとイネスの物語は今も語り継がれるポルトガル王家最大の悲劇。これをドラマチックなミュージカルに仕立てたのである。コインブラが最も古い町でその名を冠する大学の町であることは知っていたがこのような話があることは全く知らなかった。その出来栄は宝塚を知って日の浅い素人が言うのも変だが、素晴らしいの一言で感動的であった。全体の曲調もなんとなく物悲しいメロディーで、ファドのようにも感じてしまったほどである(ひょっとしてファドか)。

3年前だが8年ぶりに海外旅行に出かけた。行き先はポルトガルと決めていた。日本のように小さく資源もない国で日本とも昔からつながりのある国、そしてファドの国。フリータイムにはリスボンのファドの街を訪ねよう。どうしたらそこへ行けるか。思案の結果思い余って月田秀子さんに電話を架けアドバイスももらった。ひとりでは行かぬこと、タクシーを必ず使うことなど親切に教えていただいた。しかし、同好の士も見つからず怖気も手伝って断念してしまった。代わりにリスボンの塔周辺を巡り、目抜き通りのビストロで鯛の丸焼きに舌鼓を打つことになった。

鯛と言えはかねてより気になることがあった。私の好きな歌手に「ノラ」の門倉有希がいる。彼女が歌う歌の歌詞に「焦げて匂う鯛よ 赤い酒の美味しさよ… 女はみんな黒を着て浜で網をつくろう…」というのがある。阿久悠作詞、浜圭介作曲の「ナザレの舟歌」である。どこで作った詩なのか。その疑問は解けたと思う。大西洋に面したナザレという町を訪ねた折、老婆たちが皆黒い服を着ているのを発見したのだ。そしてあちこちから匂ってくる鯛の焦げる匂い。阿久悠はここへ来たのだと思った。演歌歌謡はファドに似たところがあると言えは言い過ぎだろうか。ついでに演歌歌手大石まどかの歌に「裏町ファド」というのがある。2001年にラジオで聴いたときハド?ファド?って何だろうなと思ったことがある。

私がファドを知ったのは今から6年前になるだろうか。大阪ミナミにアートクラブというライブハウスがある。その2年前からシャンソンやジャズを聴いて

いたのだがファドというものには全く関心が無かった。月田秀子のライブがあった第3木曜日はいつもよそへ出かけていたが、ある日気まぐれに聴いてみることにした。その時の感想は、すごいな、こんな歌もあるんだ!の一言に尽きる。ステージがひとつ終わって私がうとうとしていると秀子さんから声を掛けられたがそれがとても嬉しかった。「居るのよね、こんな風に疲れ切った男が…」確かこのようなせりふであった。

私のリクエストに応じて日本語の歌を歌ってくれた。それが「ギターよ静かに」。カンツォーネであったが私はそれがとても気に入り後日楽譜のおねだりをしてしまった。それから、ピアノバーに通い特訓を重ね何とか歌えるようにはなったが、まだ披露はしていない。

そのころは子守歌代わりにファドを聴き、どっぴりとファドに浸かっていたと思う。当時は、ストレスの溜まる一方の毎日であったからファドはほんとに心地よく心に響いた。送られてきたファド通信のバックナンバーをじっくりと読んだ。ファドとは何か、秀子さんは何故ファドを歌うのかなどいろいろ考えたものだ。その答えを自分なりに整理し得心していたが、今はなぜかその時の言葉は断片的に浮かぶだけで描けない。定年を迎え、ひと山ふた山越えたからであろうか。人は同じ感覚を何回も味わうことがある反面、一度感じた感覚、感情を全く同じには味わえないというのも真実だ。これを成長というか鈍化というかともあれその時のことを懐かしく想う。

ライブのときの科白「人は何のために生きるのか。それは何のために生きるかそれを探すために生きるのだ」は、印象深くほんとに心に残る名言だ。生きて行くしかないから生きているというのが正直なところだが、ただ懸命に生きることでよい、そして時にはあの科白を思い出せばよいのだ、と思う。

これを書いているときちょうどNHKでちあきなおみの特集を放送していた。彼女もファドを歌っているとの解説。すぐにMDを出して聴いてみた。「秘恋」…ああ、やはりファドだなと思う。おそらくはコインブラの話であろう。何がこの偶然を呼び寄せたのだろうか。

私はジャンルにかかわらず歌が好きだが選ぶ曲はたいてい寂しく悲しく静かな曲が多い。それらの中で一番際立つのが月田秀子のファドだと思う。今、世は変わり目のとき、そして晩秋。ファドの季節なのか。過ぎ行く人生をふと思うとファドを想わずにはられない。

「病院で ファド」

きうびい

ファド倶楽部会報 60 号おめでとうございます。還暦に達するにはまだ 20 年以上ある私ですが、お祝いに、私の「サウダーデ」を贈ります。

2007 年 3 月、私は入院することになった。りんかい線沿いにあるその病院は、種類は様々であるものの、患者は全員同じ病名だ。各々が快方に向かって、または最期まであきらめず、または極めて静かに、治療に励む。そのため、不思議なほど病棟に悲痛さがない。施設は巨大で、病室にも陽がいっぱいに注ぐ。誰も薄暗い病院など好まないだろうが、私の場合は違った。両眼を患ったため、何もかもが眩しかったのだ。本も読めず、テレビも観られず、ただ目を閉じているか、しゃべるか、コーヒーを飲むしかない。とはいえ、暇な時間はなかった。そんな余裕の全くない、地獄の治療であった。

しかし、入院中、ひとつだけ、目を使わない楽しみを見つけた。病院の五階カフェ横に、「入院患者のみ利用可能」な、ピアノがあったのである。

私の相部屋には、自称「テイチクから印税をもらっていた」女性がいた。ある日治療が終わったあと彼女と歓談していたら、「じゃ、のど自慢やりましょうか」ということになり、同室のもう一名と五階へ移動。テイチクさんは、美空ひばりのナンバーを熱唱。テイチクさん、自称じゃなくて本当にプロ。久々ののど自慢で、もう誰も止められない 73 歳に、きうびいひたすら伴奏。よっぽどご満悦だったらしく、具合が悪く何も食べられなかったテイチクさんは、その日の夕食をすべてたらいらげた。主治医が仰天していた。音楽の力は偉大である。

演奏技術はさておき、ほぼ毎日の「マイピアノタイム」は結構評判がよく、私が弾いている時間にわざわざ来て下さる方もあった。もちろん楽譜などないので、公衆電話で母に「ここに幸あり」を歌ってもらって覚え（テイチクさん用）、その他、古今東西の曲を弾きまくった。「あしーたがある あしーたがある」と、点滴をひっぱりながらメロディに乗って歌ってくれる人がいた。明日があるかどうかわからない人々が、この病院には大勢いた。だからこそ、私が選ぶ歌はみな極めて明るい前向きなものばかりだった。ただし、利用時間終了 30 分前からは、必ずファドを弾いていた。

「アルファマ」は、前奏のやるせない旋律の響きが抜群だった。というのも、すぐ左隣りにある美容室がすでに閉店していた時間帯だったからだ。涙が出るように祈りながら「涙」を奏で、「老いに寄せるバラード」などはもう・・・ほとんどNHKラジオ深夜便に勝手に生出演しているような気にさえなったりならなかったり。そして、大切な一日のプレイタイムの「締め」は必ず、ピアノだとさらに、たまらなくせつなく響く「あの曲」であった。

退院間近のある日、「あの曲」を奏でていたら、少し離れたところからじーっとそれを聴いていて、私が弾き終えてから拍手をしてくださったパジャマ姿の紳士がおられた。

「素敵なお曲ですね。なんという曲ですか」

「えー、これは、これは・・・月田秀子さんという、ファド歌手のレパートリーです、ポルトガルの音楽です」「旋律がとてもいいですね。どんな歌詞なんですか」「メロディが綺麗ですよ。ちょっと哀愁のある音楽です。月田秀子さんという人が歌っていますので、ぜひ月田秀子さんをよろしく」

ちぐはぐな会話であることにお気づきのことだろう。私は、曲でも歌詞でもなくひたすら月田秀子を連発してしっかり営業していたのだ。というのも、曲名と、歌詞が、どうしても彼に伝えられなかったからである。それは何故か。

なぜなら「あの曲」とは・・・夢を沈める究極の下向きソング、「難船」だったからである。しかし、きれいな旋律を聴いて喜んでくださった紳士の思いを海の底に沈めるわけにはいかない。ついでに月田秀子という「美人歌手」だと強調して伝えたので、絶対に彼の気持ちは一瞬上がったに違いない！

と、いうわけで、今でも外来診察のたびに、私はその思い出のピアノのある場所へ赴く。もう会えなくなってしまった人たち、過ぎ去った、大変だったけれど大切にしておきたい出来事に思いをはせながら。そして、あの静かな 30 分をくれたファドと、その素晴らしさを伝えてくれる月田さんに感謝し、あの紳士に「難船という曲です」と言えなかったことを毎回後悔しつつも、やっぱり伝えなくてよかったなと思いなおすのである。

ああ、サウダーデ



関東組:飯泉昌宏(ポルトガルギター)、小林智詠(ギター)
 関西組:上川 保(ポルトガルギター)、水谷和大(ギター)
 共々今年もよろしくご声援下さいますようお願い致します。



●定例ライブ「昼下がりのファド」4月から始めます！

今年から、東京四ツ谷「マヌエル・カーザ・デ・ファド」での定例ライブのうちの一回を「昼下がりのファド」として日曜の昼間に開催することにいたしました。これは、夜は出にくいという女性や年配のファンの方々の声に応えたものです。定着するまでは時間がかかると思いますが、どうか、関東地方のファンの皆様、ぜひ、かけつけて月田を盛り上げて下さいませよう、夜のライブと併せて(!)、お願いいたします!!!

3月 4日(金)神奈川「グリーンホール相模大野」

開場:18:30 開演:19:00

チケット:2,000円(当日2,500円)

*ギタリスト渡辺隆哉さんのコンサートに客演、ファドを4曲歌います。 問合せ:申し込み:045-797-0163

3月 5日(土)「千葉市若葉文化ホール」

「勲章受章記念コンサート」

開場:13:30 開演:14:00

チケット:1,800円(前売一般)

*問合せ:043-237-1911(若葉文化ホール)

3月23日(水)練馬・大泉学園「ゆめりあホール」

「勲章受章記念コンサート」

開場:14:00 開演:14:30

前売3,000円/当日3,500円

※全席自由席(チケット購入[予約]順入場方式)

*予約・問合せ:045-788-8782

(アンデルセン文化事業部)

3月31日(木)大阪・南方「三裕の館」*要予約

開演:20:00

料金:5,000円(ワイン飲み放題・オードブル付)

*予約・問合せ:06-6304-1745

4月 1日(金)神戸・三宮「サロン・ド・あいり」

開場:18:00 開演:19:00

料金:5,000円(料理・ドリンク付)

*予約・問合せ:078-241-1898

4月 2日(土)名古屋「崇覚寺本堂」

「花まつりの午後のコンサート」

開演:14:00

料金:4,000円

*予約・問合せ:052-332-5820(水谷)

4月10日(日)東京・四谷「マヌエル」*要予約

「昼下がりのファド Vol. 5」

開場:12:00 開演:13:30

料金:5,000円(料理・チャージ込)

*予約・問合せ:03-5276-2432

4月11日(月)東京・四谷「マヌエル」*要予約

「サウダーデの夜 Vol. 85」

開場:18:00 開演:20:30/21:30

ショーチャージ:2,800円

*予約・問合せ:03-5276-2432

5月 8日(日)東京・四谷「マヌエル」*要予約

「昼下がりのファド Vol. 6」

開場:12:00 開演:13:30

料金:5,000円(料理・チャージ込)

*予約・問合せ:03-5276-2432

5月 9日(月)東京・四谷「マヌエル」*要予約

「サウダーデの夜 Vol. 86」

開場:18:00 開演:20:30/21:30

ショーチャージ:2,800円

*予約・問合せ:03-5276-2432

6月 5日(日)東京・四谷「マヌエル」*要予約

「昼下がりのファド Vol. 7」

6月 6日(月)東京・四谷「マヌエル」*要予約

「サウダーデの夜 Vol. 87」

【編集後記】自動車教習所へ通い始めた。目先ではなく行くところへ視線を持っていくこと、見たところに人は自然にいくものだ。教官の言葉にいたく感動。わかっちゃいるけどできない私。 *アラ還の房総族にならんとす*

●新住所

〒283-0054 千葉県東金市下谷 314-3

TEL:0745-71-2133 FAX:0745-71-2132 mail:info@fado.jp